

豊松協働支援センターだより・結い

令和7年7月15日

豊松協働支援

センター発行

第94号



笑顔で暮らせる 持続可能な地域づくり



～とまつむらナウ⑥～日本の食を支える米作り～



農業組合法人里山ファーム大坪 役員
大坪和樹(おおたわかずき)さん
年齢:35 歳
出身地:現住所:神石高原町上豊松
職業:農業(米・野菜の生産)

菅農園 菅勉さん(55 歳)・ちづるさん(54 歳)
出身地:勉(つとむ)さん=千葉県印旛郡、
ちづるさん=千葉県千葉市
現住所:神石高原町上豊松
職業:農業(トマトの栽培)



■**農家を継いだきっかけ**
高専を卒業後、20 歳から大阪に本社を置く会社から派遣され、福岡や滋賀で機械設計の事に就き、6 年間ほど地元を離れていた。農業は代々続く家業であったため、10 代の頃から漠然と後を継ぐことを考えており、24 歳の時に、父が立ち上げた農業組合法人の後継ぎになることを決意し豊松に帰って来た。

■お米づくりについて

故郷に帰って来て家業を継いだ時は、約 10ha の作付面積だったが、高齢化で米作りができない農家から依頼を受ける形で、現在は 100 枚以上の田んぼを管理し、作付面積 13ha までに拡大した。米を含め野菜全般を生産しスーパーなどの直売所などへ出荷をしている。ここ数年は、肥料や燃料、機械代の高騰も重なり農家も大変な状況だが、まだまだ売上を伸ばすため日々進んでいる。

■令和の米騒動について

世間では「令和の米騒動」と揶揄されているが、生産者としては適正価格かつ少しでも高く販売したい。現在の店頭価格は異常だとは思いますが、米作りの苦労を知っていただくきっかけになれば嬉しい。

■豊松への想い

これ以上豊松が廃れないよう産業の核となる米作りを大切に、農業を通して豊松という地域へ貢献できる企業になりたい。また、青年会活動を通して、1 歳 5 か月になる息子を含めた「豊松の子ども達」が楽しんで暮らせる村づくりの一助になれば嬉しい。

●メッセージ！！

耕作放棄地が増える中で、若い方には積極的に農業をやって欲しい！

荒れ地が増え景観も悪くなり田畑が使えなくなれば地域としての収穫量も減少する。せめて、田畑を持っている方は、「自分で食べるお米」や野菜は自分で作る」という意識を継続して欲しい。10 年先は見えないが、みんなが神石高原町のために動き、神石高原町を支える覚悟を持ってくれたら嬉しい。



はたる祭り開催！！(6月14日)



ホテル写真:山田政志さん(観光協会)



前日も雨が降り、当日も降ったので、上り下りの天気です。天気がいいから準備をしていると、雨と一緒に雨も上りの観音地から「ホテルが飛んでるよ」との連絡が。お客様も大喜びでした。「あんなに沢山のホテルは初めてです。」ホテル見だのは始めて、「など楽しんで帰りました。来年も待ってます。」

～クローズアップ縁⑥～トマト栽培 28 年の歴史～

菅農園 菅勉さん(55 歳)・ちづるさん(54 歳)
出身地:勉(つとむ)さん=千葉県印旛郡、
ちづるさん=千葉県千葉市
現住所:神石高原町上豊松
職業:農業(トマトの栽培)



■**豊松に移住したきっかけ**
勉さんは、千葉では福祉施設に勤務していたが、もともと自然に興味があったため退職し、長野県の蝶ヶ岳にある山小屋でアルバイトをスタートした。自然に魅了され田舎暮らしをしたいと求人雑誌のウタターン情報を検索していた際に、現在のトマト団地を知る。見学のつもりで町役場を訪ねたところ、そのままの流れで面接となり、即受け入れ OK という事で 27 歳の時に第 2 期生となった。23 歳の時に結婚した妻ちづるさんと共に神石高原町へ移住し早や 28 年となる。

■トマト栽培について

1 年目は農業初心者という事もあり右も左も分からず試行錯誤した。加えて、栽培していたトマトが病気にかなり収穫量も少なかった。作付面積 3 反(4,000 本程度)でスタートしたトマト栽培も 2 年目以降はほぼ順調に収穫でき安定的な経営が続いている。10 年目には作付面積を倍以上の 7 反(12,000 本程度)に増やし、現在は 8 名のスタッフを雇うまでとなった。品種も桃太郎からりんこ、そして現在の麗月へと変化し、劣化等の規格外商品が激減した事で売上も上がっている。

■豊松への想い

当初より豊松の方々が優しく、そして温かく迎えていただき、地域へ溶け込むのに時間はかからなかった。住めば都とよく言うが、トマト栽培のない冬場には北海道や長野の山へ行くと、春になり米見山を見ると毎年「豊松の良さ」を再認識する。とにかく今のままが良い！この生活を変えず、これからも豊松に住み続けたい。

■今後の目標など

豊松に移住して 28 年。この土地で娘 2 人を育てあげ、今では孫 4 人にも恵まれた。やり切った感はずいぶんある。まだまだ農業を続けたいと思う反面、ここ数年の気候変動による猛暑は、ハウス栽培をする人間にとってはかなりキツイ上、最盛期にはトマトから目が離せないため旅行にも行けずの日々。ちづるさんは、たまには千葉の実家へ帰ったり、母や娘と旅行へ行ったりと、もう少しゆとりがほしいと語る。勉さんは、良い意味での現状維持ができ、仲間に囲まれ穏やかに楽しく過ごせれば幸せと言う。



神石高原中学校地域ふれあい行事



神石高原中学校の 2 年生 21 人が「とまつむらナウ」紙に「トマト農家の小田さんの話を聞いた後、紙に「トマト」を作製して「トマト」から飛びました。その後、昭和のおもちや・資料館を見学し、こちらの施設も生徒の皆さんは、自分達が育った神石高原町を紹介する時、是非とも紙に「トマト」やおもちや・資料館も PR してほしいです。



